

本年は春先からの新型コロナウイルスの流行により、日常生活で大きな変化を余儀なくされた方々も大勢いらっしゃると思います。

本日取り上げる道元禅師の『正法眼蔵』には家の日常と書いて「家常」という巻があります。仏様の御教えに基づいて生きる者たちの日常という意味です。そこでは仏教に生きる者たちの日常の姿として幾つかの逸話が取り上げられています。

中国唐の時代の<sup>ひやくじょう</sup>百丈禅師のもとにある時一人の僧侶が訪れます。百丈禅師に「仏様の御教えの中で特別なこと、秘訣があるとしたらそれは何ですか。」と尋ねると、「この大いなる百丈山で坐禅をすることだ。」と答えたそうです。

その質問した僧侶にしてみれば、そんな当たり前のことかと、がっかりしたかもしれません。道元禅師の師匠である如浄禅師は、この話を取り上げて「私に言わせれば、特別なこと、秘訣とはどこの寺に移り住んでも前と変わらずこの食器にご飯を盛って頂く事に他ならない。」とお示しになっています。

また中国唐の時代の<sup>じょうしゅう</sup>趙州禅師は、新参の修行僧がやって来ると必ず「あなたはかつてここに来たことがあるか。」と尋ねたそうです。相手が「来たことがあります。」と答えようと、「来たことはありません。」と答えようと、趙州禅師は押し並べて「お茶でも飲んでまた出直

## 『 禅のこころ -曹洞宗- 』

---

してきなさい」と答えて門前払いしたそうです。新参の修行僧にとってみれば、有名な趙州禅師の下には何か仏教を学ぶ上で特別な秘訣のようなものがあるのではないかと期待して訪れたことでしょう。しかし趙州禅師はそんな下心には惑わされません。私達の生きるこのありふれた日常つまり「家常」の場、“ここ”の大切さに気付かない限り来訪者は皆門前払いとなるのです。

もし私達が仏様の御教えに基づいて生きるならば、坐禅をし、ご飯を頂き、お茶を飲む、などの当たり前前の日常の行為に、仏様の御教え、仏法そのものが脈々と息づいているのだという事に気付かねばなりません。すると今までのありふれた日常の姿は、特別なこととなって輝きを放ち始めます。

新型コロナウイルスは私達に様々な変化を強い、息苦しさ、不安、心配をもたらしています。しかしそんな時だからこそもう一度私達の身の回りの日常、つまり「家常」に思いを寄せてみませんか。当たり前すぎて目にも留まらなかったような様々な物事が、私達の側の眼差しや関わり合い方をちょっと変化させることによって、新たな輝きを放って振り向いてくれるはずで

す。

— 終 —